

あきたからの米レター

出穂8月2日平年並み(平年差-1日)

ほ場内・株内のバラツキ大きい！！

出穂後の飽水管理と冷たい水の掛け流し励行

斑点米カメムシ類の注意報発令、防除の徹底

7月25日に各地域振興局農林部農業振興普及課が調査した定点ほ場の結果では、全県平均でみると、草丈は79.4cm(平年比107%)、m²当たり茎数は425本(同85%)、葉数は12.6葉(平年差+0.4葉)、葉緑素計値は39.6(平年比102%)である。この時点で生育は3日ほど早まっている。一見、茎数が少なく、葉色が平年並みになっていることから、減数分裂期には追肥(穗肥)を行うことが出来る状況に見える。しかし、草丈が長く地域差・ほ場間差が大きいことから、生育・栄養診断(とくに倒伏診断)を行って追肥を実施することが肝要である。7月に入ってから一時高温・多照で経過したことから、溝掘りや中干しを十分に行われており、飽水管理による地力窒素を発現させて稻に吸収させ、一茎の充実を図ることが必要である。

一時、出穂は大幅に早まるものと見込んでいたが、7月第6半旬以降の日照不足と大雨により、平年並み(平年差-1日)の8月2日となった。また、斑点米カメムシ類の水田内への侵入が早く、発生量が多いことから、県では注意報を発表し、発生状況に応じた薬剤の散布を呼びかけている。ここ数年被害が多くなっていることから、出穂後10日頃に薬剤の散布と、その後の畦畔、農道等の草刈りを実施し、カメムシの被害に遭わないように心掛ける。

各地域振興局農林部農業振興普及課の定点調査

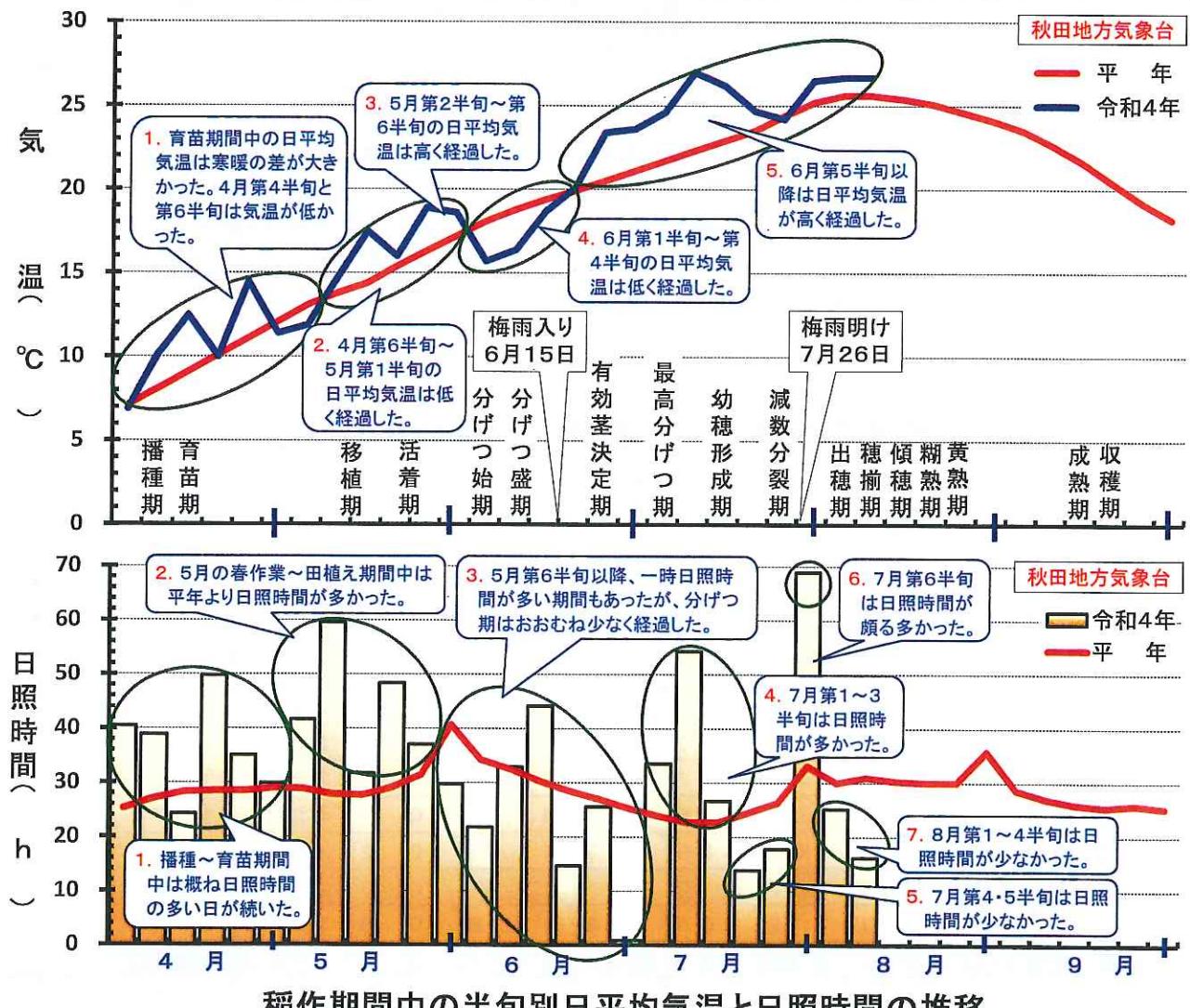
令和4年7月25日

地域	調査 点数	草丈		m ² 当たり茎数		葉数		葉緑素計値		出穂期	
		本年	平年比	本年	平年比	本年	平年差	本年	平年差	本年	平年差
		(cm)	(%)	(本)	(%)	(葉)	(葉)		(%)	月/日	日
鹿角	5	75.0	105	455	85	12.6	0.4	37.2	98	8/4	0
北秋田	9	78.3	106	398	77	12.7	0.2	38.8	101	8/3	0
山本	9	79.1	108	398	79	12.7	0.3	39.9	107	8/1	-1
秋田	10	85.0	111	402	88	12.9	0.5	39.7	107	8/2	1
由利	2	79.3	113	417	89	12.2	0.5	38.6	102	8/3	-1
仙北	10	76.8	105	423	85	12.4	0.4	38.4	103	8/1	-1
平鹿	11	79.5	107	469	91	12.4	0.1	42.0	107	8/3	-1
雄勝	8	80.1	108	439	87	12.5	0.2	39.8	101	7/31	-4
県北	23	77.9	107	410	79	12.7	0.3	38.9	103	8/3	0
中央	12	84.1	112	405	88	12.8	0.5	39.5	104	8/2	0
県南	29	78.7	106	445	88	12.4	0.3	40.2	101	8/2	-1
全県	64	79.4	107	425	85	12.6	0.4	39.6	102	8/2	-1

各JAの生育状況

令和4年8月1日現在
聞き取り及び達観調査

J A名	生育ステージ	生育の遅延	生育状況	病害虫の発生	特記事項
かづの	出穂始期	平年並み	やや不良	平年並み	下位葉に葉いもちやや多い
あきた北	出穂期	1~2日早い	平年並み	平年並み	特になし
秋田たかのす	出穂期	2~3日早い	やや不良	やや少ない	特になし
あきた白神	出穂始期	2~3日早い	平年並み	平年並み	出穂のバラツキ大きい
秋田やまもと	出穂期	1~2日早い	平年並み	平年並み	特になし
あきた湖東	出穂期	1~2日早い	やや不良	やや多い	カメムシ類の発生多い
秋田なまはげ	穂揃期	1~2日早い	平年並み	やや多い	カメムシ類の発生多い
大潟村CE公社	出穂始期	1~2日早い	平年並み	やや多い	特になし
秋田しんせい	出穂期	2~3日早い	平年並み	やや多い	ほ場間差大きい
秋田おばこ	出穂期	平年並み	平年並み	平年並み	特になし
秋田ふるさと	出穂期	平年並み	平年並み	平年並み	特になし
こまち	出穂期	平年並み	平年並み	多い	草丈長く、茎数少ない
うご	出穂期	1~2日早い	やや良	少ない	茎数少なく、穂長長め



稲作期間中の半旬別日平均気温と日照時間の推移

6月は低温・寡照

**7月上旬から高温で晴れた日と大雨を繰り返す
梅雨入り6月15日で平年並み、梅雨明け7月26日で2日早い**

異常気象対策本部会議を開催、茎数確保の水管理を申し合わせ

6月は気温がかなり低く、雨の日が多くなったため、茎数が極端に少なかった(平年比75%)。7月からは気温がかなり高く、晴れた日と雨の日が交互に繰り返された。一部地域では、大雨による農作物の冠水や水田内に土砂が流れ込む等の被害が発生した。県では農作物異常気象対策本部会議を開催し、茎数の早期確保に向けた水管理等を申し合わせた。8月は気圧の谷や寒気をともなった低気圧、台風から変わった熱帯低気圧等の影響により、豪雨や1時間降水量が観測史上第1位を記録するなど、天候が目まぐるしく変化した。

6月・7月・8月上旬の気象概況(秋田市)

秋田地方気象台

6月	上旬	この期間、気圧の谷や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く、雷雨となったところもあった。このため県の南部や内陸を中心に日照時間が少なく、気温も全県で低く経過した。
	中旬	この期間、旬の初めは高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、半ば以降低気圧や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなった。
	下旬	この期間、旬の初めは高気圧に覆われて晴れたが、24日以降は曇りや雨の日が多く、24日には前線を伴った低気圧の影響で、また、27日から30日にかけては、気圧の谷や前線等の影響で大雨となったところもあった。
7月	上旬	この期間、高気圧に覆われて晴れや曇りとなった日が多くなったが、旬の中頃には気圧の谷や上空の寒気の影響で大気の状態が不安定となつたため雷雨となり、大雨になったところもあった。
	中旬	この期間、低気圧や前線等の影響で曇りや雨の日が多く、19日から20日にかけては暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で大気の状態が不安定となって雷雨となり、大雨となったところがあった。
	下旬	この期間、旬の前半は気圧の谷や低気圧等の影響で曇りや雨の日が多く、23日には上空の寒気の影響で大気の状態が不安定となつた雷雨となり、大雨になったところもあった。旬の半ば以降は高気圧に覆われて晴れや曇りとなったところが多かった。
8月	上旬	この期間、旬の中頃は高気圧に覆われて晴れた日があったが、旬の初めと終わり頃には、前線に向かって暖かく湿った空気が入り込んだ影響で、県北部を中心に記録的な大雨となったところがあった。

気象統計値(秋田市)

秋田地方気象台

月	旬	気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(h)		
		平均(℃)	平年差(℃)	階級区分	降水量(mm)	平年比(%)	階級区分	積算(h)	平年比(%)	階級区分
6月	上旬	16.0	-2.4	かなり低い	47.0	198	多い	54.7	80	少ない
	中旬	19.4	-0.2	平年並み	19.5	47	少ない	58.9	102	平年並み
	下旬	23.5	+2.8	かなり高い	76.0	131	多い	26.5	50	少ない
	月	19.6	0.0	平年並み	142.5	116	多い	140.1	78	少ない
7月	上旬	25.8	+3.7	かなり高い	4.5	6	かなり少ない	87.9	188	かなり多い
	中旬	25.4	+2.3	かなり高い	42.5	64	平年並み	40.6	88	平年並み
	下旬	25.5	+0.5	平年並み	14.5	26	少ない	86.8	151	多い
	月	25.6	+2.2	かなり高い	61.5	31	かなり少ない	215.3	143	かなり多い
8月	上旬	26.9	+1.2	高い	60.5	130	多い	41.4	66	少ない

7月は高温で晴れた日と大雨が交互に繰り返す

生育は3日早まり、草丈長く、茎数少なく、葉色濃い

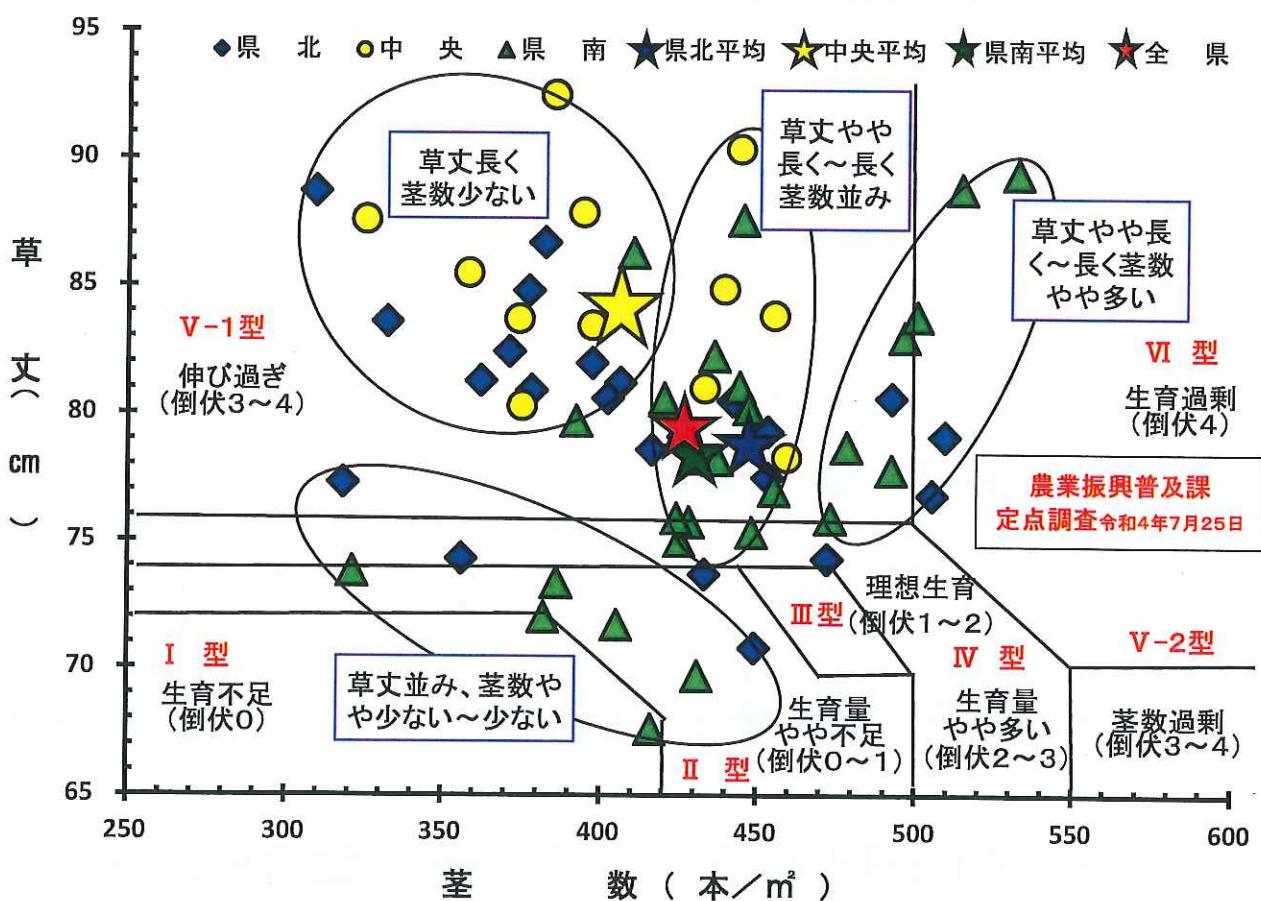
地域差・ほ場間差依然として大きい



8月5日に各地域振興局農林部農業振興普及課が調査した定点ほ場の出穂期は、全県平均でみると8月2日(-1日)でほぼ平年並みである。あきたこまちでは64地点中52地点で出穂期を迎えており、ひとめぼれでは6地点中5地点で出穂期となっている。同ほ場における7月25日の生育は草丈が長く、茎数が少なく、葉色は濃くなっている。とくに、草丈は最高分けつ期から幼穂形成期にかけて、急速に伸長し、第11葉と第12葉の葉身長が異常に伸びている。

また、幼穂形成期(7月15日)の調査では地域差・ほ場間差が見られが、減数分裂期(7月25日)ではさらに拡大している。さいわい、溝掘りや中干しを行っているほ場が多く、出穂前後は豊水管理によって、地力窒素や有機物由来の窒素を吸収させて、穂数や1穂粒数の減少を防ぐことが重要となる。

減数分裂期の生育診断

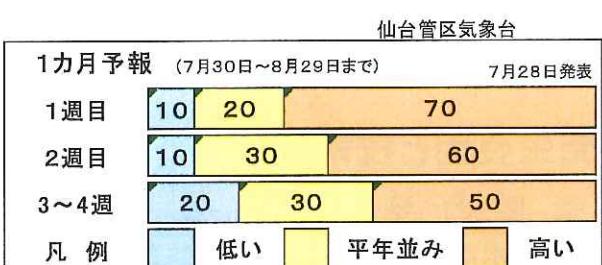


3ヶ月予報は気温の高い確率40%

8月の1ヶ月予報は気温の高い確率が50%

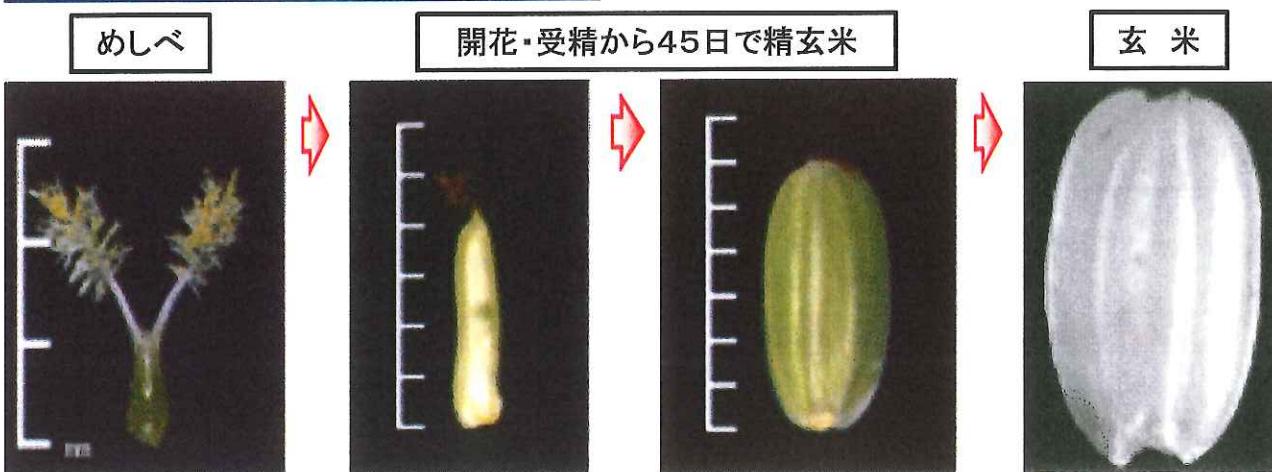
期間の第1週は気温の高い確率が70%、第2週は60%

仙台管区気象台が7月21日に発表した8月～10月までの3ヶ月予報では、気温の高い確率が40%であると発表した。しかし、8月4日に発表した1ヶ月予報では気温の高い確率が50%であると上方修正している。また、8月4日に発表した1ヶ月予報では、期間の1週目は気温の高い確率が70%、2週目は60%であるとしている。この期間、東北北部の日本海側は、寒気をともなった低気圧や前線の影響で降水量が多く(多い確率50%)、日照時間は少ない(少ない確率40%)と発表した。気象庁は7月中旬から東北北部を中心に大雨による洪水や土砂災害に対する注意を呼びかけている。日本付近は太平洋高気圧とオホーツク高気圧の谷間に入っており、東北地方では雨が降り続くとしている。



あきたこまち穗揃い期（5月18日田植え）
JAあきた湖東五城目地区 令和4年8月6日

玄米の発達過程



出穂前後の主な栽培管理

出穂後30日間は飽水管理を行って白未熟粒の発生を防ぎましょう

★ 適正な水管理の実施

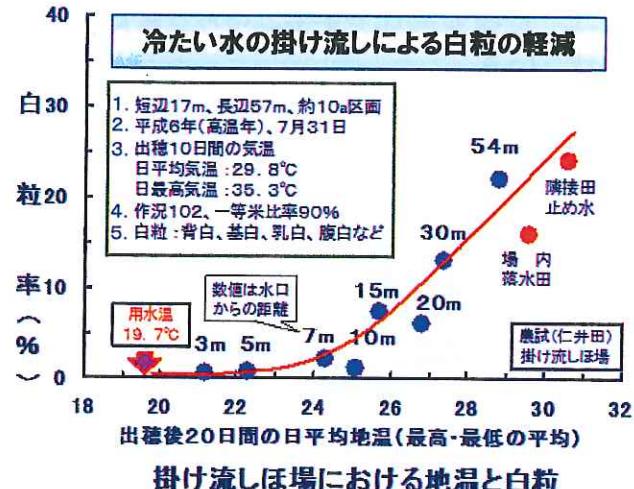
- ◎ 幼穂形成期から出穂期は間断かん水を行う。低温時には前歴及び危険期深水管理を行う。
- ◎ 出穂後10日間は、水を最も多く必要とするので湛水管理を行い、その後飽水管理を行う。
- ◎ 最高気温が30°C以上の高温時には掛け流しを行い、地温を下げて根の活性を維持する。
- ◎ 落水時期は出穂後30日を目途に行う。収穫作業を考慮して早める傾向にあるが、早すぎると玄米の品質低下を招く原因になる。

白未熟粒・胴割れ粒の発生条件

出穂後の気象条件と胴割れの関係（ほ場試験）

気象要素	出穂後日数(日)				
	1~10	11~20	21~30	31~40	41~50
日平均気温	0.86	0.68	0.74	0.17	0.16
日最高気温	0.91	0.68	0.53	0.01	0.14
日最低気温	0.69	0.68	0.71	0.25	0.18
日照時間	0.86	0.42	-0.21	-0.14	-0.04
降水量	-0.86	-0.36	0.14	0.39	0.23

白粒と胴割れ粒の発生する条件	白粒	胴割れ粒
関与する生育時期	出穂後2~3週間	出穂後10日間(開花後6~10日)
気象条件	高温、小照、最低気温	高温、多照、最高気温
穀果の着生位置	穀梗の基部(強弱結果)	穀梗の先端部(強弱結果)



高温登熟による被害粒の発生要因と技術対策

項目	気象的要因		栽培的要因	技術対策
部分着色粒 (カメムシ)	出穂後の高温		畦畔・水田内の雑草で増殖	適期防除: 出穂後10日頃
			防除、除草の不徹底	畦畔・水田内の除草の徹底
黒点症状米 (クサビ米)	出穂後の高温		高温時のかん水不足 (水分ストレス)	夏期常時飽水管理
			粒数過多	粒数制御 掛け流し(水量確保) 夏期常時飽水管理
白未熟粒	乳白 心白	出穂後 4~20 日頃の高温		穗肥 掛け流し(水量確保) 夏期常時飽水管理
	背白 基白	出穂後 16~24 日頃の高温	登熟期後半の肥切れ	穗肥 掛け流し(水量確保) 夏期常時飽水管理
充実度不足粒		登熟期間の高温	登熟期の肥切れ	穗肥、掛け流し
胴割れ粒			登熟期の肥切れ	穗肥
			早期落水	掛け流し(水量確保) 夏期常時飽水管理
			刈り遅れ、過乾燥	適期刈り取り、2段乾燥

斑点米カメムシ類の被害に注意！！ 注意報発令2回防除が必須！！

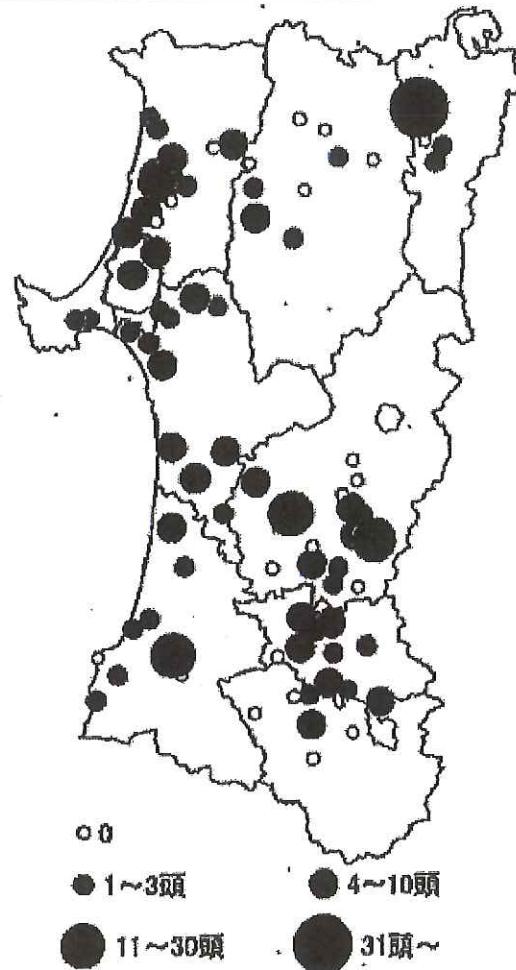
注意報発表の根拠

- 8月第1半旬に行った抽出ほ場調査(80点)での斑点米カメムシ類のすくい取り数(20回振り)は3.6頭(平年3.0頭)で平年並みだったが、発生地点率は71.0%(平年43.0%)で、県内広範囲に発生が確認された。また、出穂したイネ科雑草や新葉が伸びている畦畔の斑点米カメムシ類のすくい取り数は除草が徹底されたほ場と比較して多かった。
 - 8月4日に仙台管区気象台が発表した8月4日の1カ月予報によると、向こう1カ月の気温は「高く」、降水量は「平年並み」か「多い」としており、今後さらに発生量が多くなるものと予想される。
 - このことから、本年の薬剤防除は2回散布を基本とする。1回目の防除は、出穂10日後頃にアルバリン剤又はスタークル剤を畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布する。
 - 2回目の防除は、出穂後24日後頃にエクシード剤又はキラップ剤を茎葉散布する。

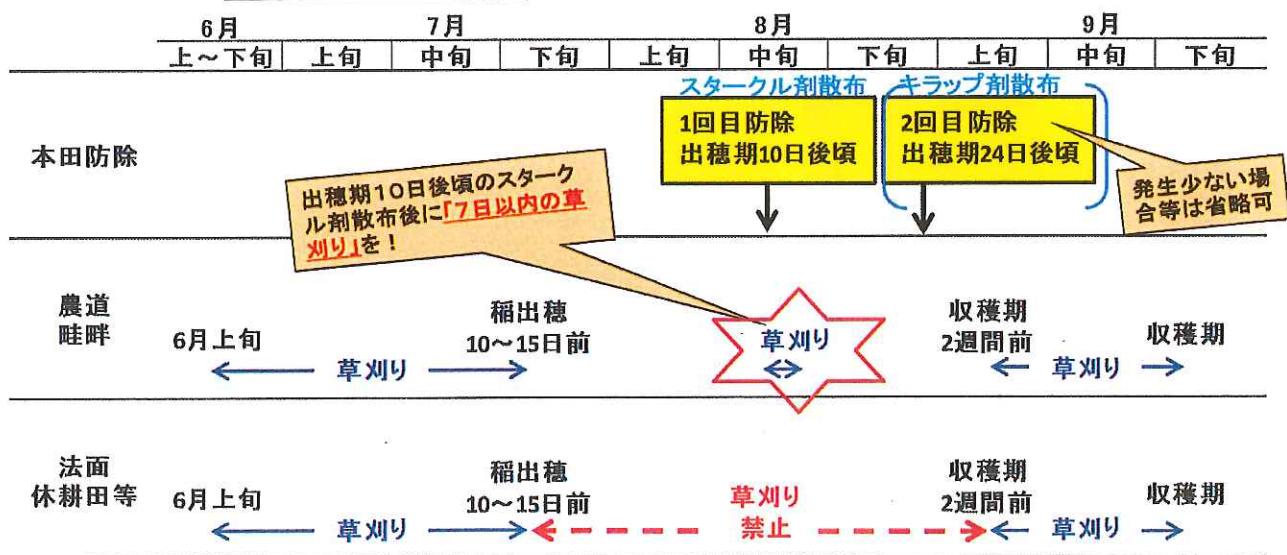
秋田県病害虫防除所(令和4年8月9日)



アカスジカスミカメ



水田内における斑点米カメムシ類 のすくい取り数（8月第1半旬）



「サキホコレ」現地講習会開催

7月27日、令和4年から本格的に市場デビューする「サキホコレ」の現地講習会が、JA秋田おばこ大仙市東部営農センター管内の(農)北川目ファームほ場で開催された。栽培推奨地域の各JA「サキホコレ」研究会及び特別栽培米生産者、稻作営農指導員など52名が参加して行われた。

JAGループでは特別栽培米等の生産に取り組み、その栽培、品質出荷基準についてJAグループ独自基準を設定し、さらなる高品質・良食味米の生産・販売をめざして、令和2年から現地試験を実施し、今年で3年目となる。

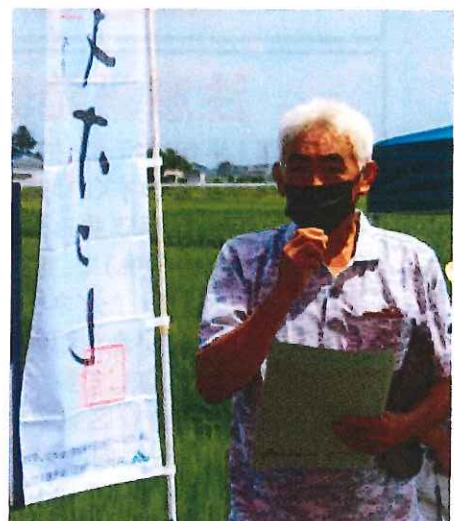


サキホコレ有機入り専用肥料試験
生産資材部次長:三村正彦



栽植密度・メタン抑制試験
JA秋田おばこ東部
営農セ課長補佐:齊藤雅之

ホサキ
秋田米
うまさ満開



あいさつ
秋田米新品種「サキホコレ」研究会
会長:佐々木竜孝



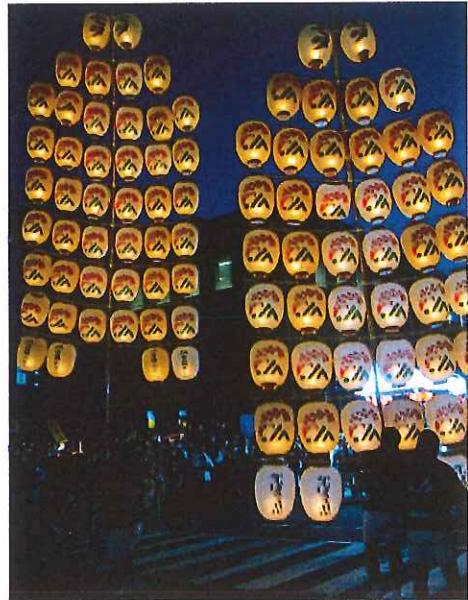
サキホコレ施肥反応試験
米穀部参与:児玉徹



参加者のほ場視察

JA全農あきたは
3年ぶりに秋田竿燈
まつりに協賛した。

秋田 竿燈まつり



今年はコロナ禍で中止していた秋田竿燈まつりが開催され、JA全農あきたは8月3日～6日にかけて3年ぶりに協賛した。米の国秋田は夏本番を迎える、田んぼのあちらこちらで稲穂が顔を見せ始めた。竿燈が夜空に舞い踊る様は、稲穂が風に揺れるように見られることから、五穀豊穣を祈ると言われている。8月上旬の大震災からの早期復旧を願い差し手にも力がこもる。





我が家の中のサルスベリ



国道285号線のサルスベリ JAあきた湖東 令和4年7月28日

5月第6半旬から6月上旬の低温・寡照により、草丈が長く茎数の少ない生育で出穂期を迎えた。東北北部の「梅雨入り」は6月15日ころで平年並み、「梅雨明け」は平年より2日早い7月26日ころとなった。この期間、天候が周期的に変化し、寒気をともなった気圧の谷や台風から変わった低気圧の影響により、県内いたるところで大雨やゲリラ豪雨により洪水が発生し、農作物に大きな被害を与えた地域があった。気象庁が今年6月1日から線状降水帯予報を開始した矢先、本県では今まで遭遇したことのない大雨に見舞われ、土砂災害警戒情報が県北・中央部に発令された。世界的にはヨーロッパの異常高温による森林火災、アジアでは大雨による自然災害による被害が起きている。人類には新型コロナウイルス、サル痘等の感染症が広がりを見せている。なにか自然界で異変が起きているのではないか、一抹の不安を感じる。

7月25日の各地域振興局農業振興普及課定点調査の結果では、全県平均でみると、草丈は79.4cm(平年比107%)、m²当たり茎数は425本(同85%)、葉数は12.6葉(平年差+0.4葉)、葉緑素計値は39.6(平年比102%)である。この時点で生育は3日早まっている。草丈が長く地域差・ほ場間差が大きいことから、生育・栄養診断(とくに倒伏診断)を行って追肥を実施することが肝要である。さいわい7月上旬は高温・多照で経過し、溝掘りや中干しが十分行われており、飽水管理による有機物や地力窒素の吸収により、葉色は濃く経過している。出穂期は3日程度(平年8月3日)早まるものと予測していたが、7月第6半旬から続いた低温・寡照によりやや遅れて(8月2日)出穂を迎えた。

我が家の中のサルスベリは、7月20日ころ一斉に咲き、いつもの年より早かった。サルスベリは漢字では「百日紅」と書き、「散れば咲き 散れば咲きして 百日紅」と古くから詠われるとおり、新しい花を次々と咲かせ続けるが、今年は一斉に咲いている。JAあきた湖東井川カントリー前の国道285号線沿いのサルスベリも一斉に咲いている。いつもなら早く咲く木から遅く咲く木まであって長く楽しめたが、今年は花の街道と化している。通勤の道すがら心が和み、この季節ならではの景色である。

稻は春先からの気象変動を克服して出穂したが、これから実りの秋を迎え、稻にとっても正念場を迎えている。どんな気象になろうとも、気象変動に対応した栽培技術を駆使して整粒歩合が高く、高品質・良食味米の安定生産を心掛ける必要がある。もう一踏ん張りである。**こだま**

全国農業協同組合連合会 秋田県本部
〒010-8558
秋田市八橋南2-10-16
URL:<https://www.zennoh.or.jp/ak/>

次回の発行は9月12日頃

資料の使用に当たって
は米穀部の許可を得る

JA全農あきた米穀部
〒011-0901
秋田市寺内字神屋敷295-53
TEL: 018-845-8500
FAX: 018-880-1572